

研究活動支援事業を利用したきっかけは？

仕事と子育ての両立は時間との戦いです。漢方医学教育の教育効果に関する研究をしておりますが、収集したデータを入力する時間が取れず、研究が大幅に遅れていました。利用を上司に勧めいただき申請しました。(佐藤先生)

利用者

医学系研究科総合医療学
講師 佐藤 浩子 先生



この支援をきっかけに、興味のある統計への理解を深めることができたという強い手応えを感じています。また、佐藤先生と一緒に進めていくことで、実践力が身につく、確実にスキルアップへと繋げることができたと思います。(渡辺さん)

支援者になって良かったことは？

支援者

医学部医学科4年
渡辺 由佳子 さん

渡辺由佳子さんに、主としてデータ入力をお願いしています。良いご縁で、工夫して入力して頂き助かっています。支援の時間とは別に、統計を共に勉強できる関係を築けたことが貴重であったと思っています。(佐藤先生)

どのように支援を利用していますか？

研究活動支援 VOICE Vol.1

平成26年度より男女共同参画推進室では育児・介護等のライフイベントと研究を両立できるよう研究活動支援を行っています。今回から利用者の先生とそのサポートをする支援者の声をお届けします！

当時わたしは第二子を出産し職場に復帰したものの、助教としての研究室の仕事だけで一日が終わってしまい、自身の研究活動がまるで出来ない状況でした。「手がもう一本あったら…」を叶えてくれると思い応募しました。(茂木先生)

研究活動支援事業を利用したきっかけは？



利用者

生体調節研究所
個体統御システム分野
助教 茂木 千尋 先生

どのように支援を利用していますか？

生き物を研究対象としているので実験動物の維持と管理は欠かせない作業ですが、限られた勤務時間内で自ら行うのは難しく子どもの病気でも休めません。これを支援してもらうことで研究の時間を捻出することができました。また、支援の学生さんの笑顔に元気をもらっています。休職や休業中でも復帰のために動物の世話は必要なので、より柔軟に利用できるようになるとより良いと思います。(茂木先生)

普通のアルバイトや学校の授業ではなかなか触れる機会のないことが経験でき、とても楽しいです。また、授業の空いた時間などを有効に活用することができます。(佐藤さん)

支援者になって良かったことは？

支援者

医学部保健学科3年
佐藤 綾香 さん



学校が始まる前の時間や空きコマの時間を使って行えるので、空き時間を有効に使えることや、研究を行っている場を実際に見ることができてよかった点だと思います。(秋山さん)

支援者

医学部保健学科4年
秋山 結穂 さん



群馬大学男女共同参画推進室

まゆだま 通信

News Letter

文部科学省 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業(特色型)

■発行
国立大学法人群馬大学
男女共同参画推進室

〒371-8510
群馬県前橋市荒牧町 4-2
TEL:027-220-7146
FAX:027-220-7143
mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp
HP:https://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/



2019.7
vol.20

「群馬大学 性の多様性に関する基本的考え及びガイドライン」策定

平成31年3月13日「群馬大学 性の多様性 (LGBT/SOGI) に関する基本的考え及びガイドライン」が策定されました。国際的な方向性である「性の多様性(性的指向: Sexual Orientation, 性的自認 Gender Identity)」、LGBTに象徴される性のあり方に限らず全ての人の性を尊重するという考えに基づき、性別に関する個人情報の保護と差別の解消、就学・就業環境の改善に向けた取組を全学で進めていきます。本学の過去の事例を検証し検討を加え、新たに「対応ガイドライン」としてまとめました。主な項目は以下のとおり。

①専門相談員による「にじいろラインメール」の設置(助言者:元国際基督教大学ジェンダー研究センター長の田中かず子氏)、②通称名や性別の変更の取扱要綱の策定、③名簿等の性別情報の保護、④性別で区別しない呼称の推奨、⑤授業及び就業での性別で区別した活動への配慮、⑥健康診断での配慮、⑦キャンパス環境の整備、⑧就職活動等の配慮等、本ガイドラインに沿って、随時運用を行っていきます。個別に相談が必要な場合は、各学部等で対応チームが継続して相談に応じます。

保健学科では、平成30年度から赤城合宿でLGBT講座を新生入生に実施しています。男女共同参画推進室主催の「性の多様性に関する講座」も継続開催する予定です。なお、「にじいろラインメール」では、本人の了承なく、その人の性的指向や性自認について暴露する「アウトティング」の予防を重視し、当事者に限らず、周囲の方やご家族からの相談にも応じています。



国立大学協会『男女共同参画に関する調査』で本学が取り上げられました

一般社団法人国立大学協会『国立大学における男女共同参画推進の実施に関する第15回追跡調査について』で、女性教員比率の上昇が顕著な大学として本学が紹介されました。

- 女性教員比率が20%以上の大学(全29大学)
→ **本学の女性教員比率は20.6%**
- 前回調査より女性教員比率が1ポイント以上増加した大学(全22大学)
→ **本学は前回より2.3ポイント増**
- 前回調査より女性教員比率が10人以上増加した大学(全18大学)
→ **本学は前回より16人増**

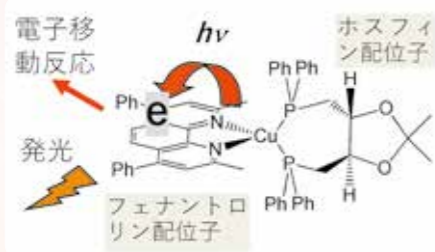
詳しくは国立大学協会ホームページ <https://www.janu.jp/gender/>

光エネルギー変換素子としての Cu(I) 錯体の励起構造の解明と反応の開拓

理工学府分子科学部門 教授 浅野 素子

太陽光は唯一地球の外から得られるエネルギーであり、人工光合成は、太陽の光エネルギーを化学エネルギーに変換し蓄えるものである。人工光合成素子として、これまで知られている第2、第3周期の金属錯体は希少で高価である。一方、Cu(I)錯体は安価で豊富にえられるが、励起状態での構造変化を伴いやすく、電荷分離状態の寿命の短くなる傾向があった。本研究では、現在、最も期待されているCu(I)錯体の光励起状態の電子構造の解明を行い、安定・長寿命とする要因を明らかにすることを目的とした。さらに人工生体膜中での反応性について検討した。

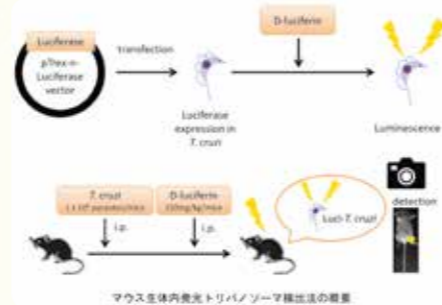
実際には比較的安定・長寿命とされるフェナントロリン類とホスフィン類が1つずつ配位する一連のCu(I)錯体を用い、発光特性の温度変化実験を行った。この結果を解析することにより励起電子状態における三重項と一重項のエネルギー差と三重項からの緩和速度を算出した。その結果、大きなジホスフィン配位子依存性があることが明らかとなった。励起状態の安定性には、Cu(I)からフェナントロリン配位子への電荷移動遷移の他に、ホスフィンからフェナントロリンへの電荷移動遷移の割合を制御することが重要であることがわかった。また、本支援により、2019年1月には桐生キャンパスで“銅(I)錯体の光励起状態の反応と緩和”と題した研究会を学外から研究者を招聘して開催した。



生体内原虫動態解析法を用いたシャーガス病慢性期動物モデルの開発

保健学研究科生体情報検査科学 助教 鬼塚 陽子

シャーガス病は寄生原虫クルーズトリパノソーマによって引き起こされ、中南米を中心に流行し、アメリカや日本を含む全世界で700万人が感染している。本疾患は慢性期に移行した患者の3割で、心疾患、消化器疾患を発症し、現治療薬では改善せず死に至る。また、トリパノソーマの感染動態と病態発症の関連は未だ不明であり、本疾患の病態形成を解明するには、慢性期病態モデル動物と原虫感染動態をリアルタイムで捉えられる、バイオルミネッセンス技術を用いた生体内原虫動態解析法の開発が必須である。そこで我々は、ルシフェラーゼ発光トリパノソーマ(Luci-T. cruzi)の樹立及び検出法、慢性期モデルマウスの構築を行った。C57BL6/JマウスにT. cruziを腹腔内投与したところ、感染6ヶ月後に体重減少が見られ、エコー画像、病理組織像の結果から心不全、つまり慢性期症状を呈したことが示唆された。また、樹立したLuci-T. cruziをマウスに感染させ、経時的にイメージングを取得した結果、感染3日目に発光を検出した。以上より、マウス生体内発光トリパノソーマ検出法及び慢性期モデルマウスを構築し、基礎的データを得ることができた。今後、構築した系を進展させ、病態形成メカニズムを解明したい。



活動報告 (A型)

平成30年度共同研究促進事業

共同研究促進事業 (A型) (大型の共同研究や受託研究のプロジェクトリーダーとなる研究を提案する) の昨年度採択者の活動報告をシリーズでご紹介します

高校生の妊娠相談におけるデートDV 関連因子に関する調査研究

男女共同参画推進室 講師 長安 めぐみ

本研究は、(社)「にんしんSOS東京」相談フォームに寄せられた15歳~17歳の少女と相談員の対話の解析である。「妊娠葛藤相談=妊娠にまつわる全ての“困った”“どうしよう”」の要因の1つにデートDV(恋人間暴力)があると仮定し解析を行った。高校生の全相談238件から妊娠に悩む本人からの相談191件を抽出した。コンテキスト解析(自然言語処理手法)を用いて相談員が「デートDV」と見立てた37件との比較を試みた。関連要因は「避妊をしない」「合意のない性交」「対等でない関係性」があげられる。実際、DV関係が疑われる相談の80%が避妊をしていない。相談員は、暴力の特徴的なエンティティの出現に気づくと、一般の妊娠葛藤相談では見られなかった特徴的なエンティティ「電話」と「大丈夫」が確認された。分析後のインタビューにおいても、経験的な対応と分析結果が合致するとの回答を得た。今後は「妊娠葛藤相談」の相談スキルにつながる特徴的なエンティティの抽出を進めたいと考えている。ご尽力いただいた民間団体の皆様、ご助言いただいた他機関、本学の共同研究者の皆様、特に、分析を手掛けた医学部附属病院鳥飼幸太氏にお礼を申しあげる。

非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) のエピゲノム治療法の開発

生体調節研究所生体情報ゲノムリソースセンター 助教 森田 純代

非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) の日本における有病率は年々増加しており、その一部は肝硬変を経て肝臓がんへと進行する可能性がある。NAFLDは他の生活習慣病と同様に、遺伝的素因に加えて生活習慣などの環境因子によるエピゲノムの変化 (DNAのメチル化やヒストン修飾の変化) によって発症すると考えられている。エピゲノムの変化は可逆的であるため、エピゲノムを健康な状態に戻す「エピゲノム治療」は非常に理にかなったことである。アザシチジンやデシタピンなどのエピゲノムを制御する化合物を用いて骨髄異型性症候群や多発性骨髄腫の治療がおこなわれているが、標的とする遺伝子以外のエピゲノムに影響を与えてしまうという問題点があった。そこで私たちはCRISPR/Cas9のゲノム編集技術を応用して、特定の遺伝子のDNAのメチル化を操作する「エピゲノム編集技術」を開発した。この技術を用いて、「NAFLDのエピゲノムを健康な状態のエピゲノムに戻して治療する」ことを目指している。

第8回研究力アップ講座 研究者のためのビジュアルデザイン講座開催

平成31年3月14日に桐生キャンパスで、同27日には昭和キャンパスで第8回研究力アップ講座を開催しました。今回は筑波大学芸術系教授であり日本サイエンス・ビジュアルリゼーション研究会の代表でもある田中佐代子氏を講師にお招きしました。講座では、ユニバーサルデザインに配慮した美しく見やすいイラストデザインについて、デザインの専門家ならではのノウハウをわかりやすく解説していただきました。また、イラスト作成ソフトウェアの便利なテクニックや、実例を使ったビフォーアフターの紹介などもあり、あっという間の90分でした。研究者がデザインの理論と実践的なテクニックについて学べる良い機会となりました。桐生・昭和キャンパスでそれぞれ43名と26名にご参加いただき、実施後のアンケートでは90%以上の方から「非常に有益であった」「有益であった」との回答をいただきました。また、「配色やレイアウトの考え方がよくわかった」「イラスト作成のコツがわかってポスターや申請書作成の参考になった」などのご意見をいただきました。年度末のお忙しい時期にもかかわらず多数の方にご参加いただき、ありがとうございました。

